

雨だれぼつん

宿輪芳泰

水曜日の午後の出来事でした。朝、外に出る時は晴れていたもので、傘を持った人はほとんどいませんでした。みちるといふ少年も傘を持ってないひとりです。

少年は海岸通りで大好きな詩をつくっていました。「月」をテーマにしたり、「海」をテーマにしたりで、あれこれ考えていました。

お空が暗くなったよ

誰かが涙を流してる

どうして泣いているの？

ふたりがケンカしたから

お空が明るくなったよ

どうして笑ってるの？

それはきつと

ふたりが仲良しだから

うーん。何か足りないような気がする。少年は思案に暮れていました。

昼過ぎになって雨がぼつんぼつん。雨雲が出て、空が暗くなったかと思うと、あつという間に激しく降り出しました。坂道を駆け上がり、みちるは広場にやって来ました。奥にある古い建物の雨やどりをしようと思ったのです。空屋で何年も人は住んでません。少年たちの間では「秘密基地」を呼んでいる所です。

ドアを開けようとしたけれど、鍵がしてあるので中へは入れません。やっぱり駄目か。みちるはがっかりして、のき先に立っていました。服もズボンもびしょ濡れで、寒さで身震いしています。

「お前もここで雨やどりか」

と、先に来ていた少年が言いました。

声の主を見て驚きました。ジャンボです。みちると同じ中学校に通う同級生です。「ジャンボ」はあだ名で、名のごとく大男のガキ大将です。彼に比べれば、みちるはきやしゃで小柄な文学少年です。

ジャンボはからかうように、

「奇遇だね、みちるちゃん、女の子と思っただぜ」

嫌な奴と会ってしまった。みちるは雨に濡れてもいいから、他の場所へ行こうと思いました。空を見上げると、矢のような雨。雨は容赦なく激しく降り続いています。駄目だ、これじゃ動けない。

ジャンボは何かをボンと叩いて、

「お前も傘を持ってないようだな、俺もだ。天気予報も当てにならないよな。あいつらも濡れながら帰っちゃった」

あいつら？ 友だちと10人ばかりで野球をしたようです。なる程、ジャンボはグローブを持っていました。と言っても、2チーム分の人数は揃ってなかったようですが。

ジャンボはまたグローブをボンと叩いて、

「満塁ホームランを打つチャンスだったのに、残念だ。満塁ホームランだぜ」

「ああ、そう」とみちるは無愛想に返事をしました。

ジャンボはヒット1本打っていたのでご機嫌でした。

「そうだ！ みちる、今度一緒に野球をやらないか？」

「野球。僕はスポーツは苦手だから」

「そう言わずに、俺みたいにヒット10本打てなんて言わないからさ」

「ルールもよく知らないし」

「心配するな、俺が教えてやる」

みちるはそんな話は興味が無いという感じであなづきました。そして、顔をしかめてくしゃみをしました。

ジャンボは笑って、

「お前、ずぶ濡れだな。俺は足が速いから、見ろよ、そんなに濡れてないだろ」

「僕の方が君より遠くにいたのさ」

と、みちるも意外に負けず嫌いです。

雨はまだ止みそうにありません。これは何だろ？ みちるは建物の赤レンガの壁の中に小さい扉があるのに気づきました。押ししてみると扉が開きます。ここにいるよりましだ。みちるは中へ入ろうと思いました。

ジャンボは、「やめた方がいいぞ」と止めています。この建物にはオバケが出るとうわさがあるからです。みちるは好奇心旺盛な、冒険好きな少年でもあるのです。

「本当にオバケがいると思う？」と、みちる。

「俺は宇宙人を見た事がある。宇宙人がいるんだから、オバケがいたって不思議じゃない」とジャンボ。

「オバケや宇宙人がいるなら、僕も見てみたいよ」

「オバケに食べられても知らないぞ」

「ジャンボはオバケが恐いんだ」

みちるは体がかがめて扉を押ししました。ジャンボが片手を挿んで止めるのと振切って、みちるは突入しました。小心者と思われてはこけんに関ると思ったのか、ジャンボも中に入って来ました。後からついてくるジャンボを見て、みちるは少しほっとしました。実をいうと、みちるも一人では心細かったのです。

二人は恐る恐る先へ進みます。建物の中はがらくたの集まりです。錆ついたやかん、片方だけのブーツ、壊れかけの机もあります。薄暗い部屋の中、本当にオバケが出そうな感じですよ。みちるはくもの巣に引つかかっていたばた、思わず声を上げました。

ジャンボは笑って、

「俺の勝ちだな。臆病者め、このくらいで悲鳴をあげるなよ」と、くもを追い払いました。ジャンボは楽しそうに笑ってます。みちるは歯ぎしりしました。人の失敗を平気で笑って、だからガキ大将は嫌いだ。

「おい、みちる。どうする？ この辺で引き返すか？」と、ジャンボ。

「まさか！ 僕は残るよ。帰りたければ、ジャンボは帰っていいよ」

「やせがまんするなよ。まあ、いいや、俺も楽しくなってきた。どうだ、勝負しないか？ 勇気の勝負だ。先に逃げ出した方が負けだ。もつとも、俺の勝ちは見えてるがな」

みちるは唇をかんで、

「いいとも勝負しよう。僕が勝ったら、土下座してもらうからね」

「よし、決まりだ。俺が負けたら土下座してやる、その代り、俺が勝ったら野球のチームに入れます。人数が足りなくて困ってたんだ」

「エラーしても怒らないでよ」

「オーケー。とりあえず外野に立っててくれてたらいい、かかしよりはましだろ」

みちるは身震いしました。雨に濡れて体が冷えてもあるのですが、ジャンボの暴言に怒りを感じたからです。くしゃみをしました。

みちるは怒鳴りました。

「雨は嫌いだ！」

次の瞬間、何かが光りましたが、少年たちは気づきませんでした。少年二人は階段を上り二階へ行きました。廊下を渡り、みちるはドアを開けようとしたが開きません。

「カギがかかっている」

「代れ、俺がやる」

ジャンボはノブを何度も強く回しましたが、ドアは開きません。「押しても駄目なら引いてみる」と、言いながら引張りましたが、開きません。ジャンボは力を込めて体当たり、残念ですが、ドアは開きません。ジャンボは両手を広げ、駄目だというポーズをしました。

少年二人は一階へ戻り、台所を探索しました。ジャンボは海賊の船長、みちるは名探偵の気分です。ジャンボはひげも無いのにあごを撫でて、宝物はないかといわんばかりに片っ端から探し回りました。しかし、特に何も発見できません。最後に机の引き出しを見ましたが宝物らしいのは何もないので、ボヤキながら机を蹴りました。

探偵気取りのみちるは壁を軽く叩きながら、何か仕掛けはないだろうかと見て回りました。最後に電気のスイッチをカチカチと押してみました。もちろん隠し扉もありませんし、明るくもありません。天井を見上げて、「蛍光灯も無いのか」とボヤキました。

みちるとジャンボは部屋の真ん中で一休み、座り込みました。二人が建物の中へ入って一時間くらいたったでしょうか。雨の降る音だけが響きます。

「おい、みちる。今、何か聞こえなかったか？」と、ジャンボ。

「何にも聞こえないよ」

「気をつけろ！ 何かいるぞ！」

「何にも見えないよ」

みちるは周りを見回して、

「その手は食わないよ。僕を怖がらせようとしてるんだろ」と、相手にしてません。

ジャンボは何かを睨みつけています。その真剣な顔に、みちるは少し不安になりました。何かが違う。いつも人をからかうのが好きな、あのジャンボが、ガキ大将が怯えてる。ジャンボの額に汗？ まさか、でも、もし本当にオバケがいたらどうしよう。

気のせいか、部屋が明るくなつたような気がしました。誰か、電気のスイッチを入れたのかな？ そんなはずはない。だって、さっき僕がスイッチを押した時はつかなかった。

照明器具が無いんだ。何？ 突然、笑い声が聞こえました。カン高い笑い声。

誰だ？ まさか！ あそこ！ 何だ？ 出たあ！

ぼんやりと何かが光ってる。少年二人は瞳をこらして窓の方に目をやると、何かが見えてきました。白い物が吊るされています。てるてる坊主が笑ってる？ みちるは悲鳴を上げました。そして、先に扉の方へ走りしました。足がもつれて転んでしまい、みちるはひざがガクガクして動けません。

耳をつんざく物すごい音。野獣が吠えたような音がしました。早く逃げないと、気持ちは動揺するばかりで体は前に進みません。みちるは自分でもびつくりするくらいの大声で助けを呼びました。顔は引つって泣いています。一つの影が近づいてきました。みちるは目を閉じて祈りました。救けて！

身も凍る思いです。僕、オバケに食べられちゃうの。嫌だ、まだ死にたくないよ。誰か救けて！ 神様、救けて！ ドククン、ドククン、ドククン。ドククン、ドククン。心臓が飛び出すんじゃないかと思いました。しかし、何にも起こりません。おかしいな？ 確かに近くに何かいる、でも野獣らしき物は襲ってこない。みちるはゆっくり目を開けました。目の前に少年の背中が見えます。

一方、ジャンボはというと、みちるが先に走り出したのに少し遅れて大騒ぎです。目をつぶって走り出したので、方角も出口とは見当違い、そして机にぶつかりました。ガシャッ！ メキメキメキ！ 机は音を立てて潰れてしまいました。先程、みちるが聞いた野獣の声はこれだったのです。痛くて大声を出そうとした時、みちるが助けを呼んでるのに気づきました。ジャンボは本能的に彼の所へ駆けつけます。その姿は、「ガキ大将」というより、「正義の味方」です。みちる

が泣き叫んでいる様子を見て、ジャンボは我に返り少しづつ冷静を取戻しました。勇気を振りしぼって仁王のごとく構えています。みちるが顔を上げてきたので、ジャンボは瞬時に少年に背中を向けました。怯えた顔を人に見られるのは恥ずかしい事だと思い、ガキ大将のプライドがそうさせたのでしょうか。

みちるは、目の前の少年がジャンボだとすぐにわかりました。救かった。いや、まだだ。根本的な解決はしてません。攻めてきた野獣らしきものはジャンボでしたが、あのオバケの正体は？向こうから声がします。

「ごめん、ごめん。脅かすつもりはなかったんだ、久し振りのお客様なんで嬉しくて」

みちるとジャンボは目を合わせました。相手は笑顔のてるてる坊主です。国語辞典より軽そうな奴です。

震えながら、みちるが言いました。

「き、君は誰だ？」

「見ればわかるだろ、てるてる坊主さ」

と、ひょうきんに答えた、てるてる坊主。

今度はジャンボが言いました。

「てるてる坊主が喋るかよ！」

てるてる坊主はにっこり笑って、いや笑ったように見えたという事ですが、

「ボクの名前はシロベエ。ずっとひとりぼっちで寂しかったんだ。ねえ友だちになってよ」

相手は友好的です。陽気に踊っているようにも見えます。少年二人は警戒しながら窓側に近寄りました。白い顔にへのへのもへじ。よく見ると可愛い奴です。つくってくれた主人はもう何年も前に引越したらしく、家はあるけれど捨て子状態のシロベエはひとりぼっちで寂しかったと言いました。

みちるは出そうとした右手を引込めて、

「僕の名前はみちる、よろしく」

「みちる君、よろしく！」と、シロベエ。

ジャンボは両手に拳をつくり、ボクサーのように構えています。そして、肩をゆさぶりました。ジャンボは自分に視線が向けられているのを感じたので名乗りました。

「人は俺をジャンボと呼んでいる」

「ジャンボ君、よろしく！」と、シロベエ。

「ジャンボだ！ 君はいらねえ」

「ごめん、ジャンボ。よろしく！」

ジャンボは用心深く、「押ッス！」と、気合を入れて応えました。

みちるは吊るされているてるてる坊主を観察していました。恐い物見たさの様子です。

シロベエは陽気に、

「ねえ、何かお話してよ」

みちるは鼻をこすって、

「何の話をして貰いたいの？」

「君の話したいお話でいいよ」

「僕たちを食べるつもりじゃないよね？」

「とんでもない！ ボクを怖がらないでよ。そうだ！ 友情のしるしを見せるね」

シロベエは吊るされた体を左右に小さく揺ぶりました。次に大きく揺ぶり、そして中くらいに2回揺ぶりました。つまり、小大中に揺ぶったのです。みちるはこれはシロベエの世界では「友情のしるし」なのだと理解しました。

みちるは国語の先生のマネをして授業中の話をしました。チョークを振り回して、自分の手のひらに落書きするのがくせです。

男性先生の口調で言いました。「顔晴る」、これは「がんばる」と読むんだ。頑張るの漢字の間違いじゃないぞ。人生は辛い。壁にぶつかった時、いやな顔をしないで、笑顔で晴れた顔して元気に生きていこうという意味だ。辞書には載ってないがな。

しーん。シロベエは反応しません。

みちるは申し訳なさそうに、

「ご免。ちよつと難しかったかな？」

「えっ？ 何？ 晴れた顔してるつもりだけど」と、シロベエ。

へのへのもへじは無表情。それを見て、みちるはおかしくなり笑いました。シロベエの顔は白い布で包まれていて表情の変化はありません。しかし、みちるにはシロベエが愉快地笑っているのがわかりました。

シロベエは、「ジャンボ君、あつ、ごめん、ジャンボ。キミも何かお話してよ」

ジャンボは校内すもう大会の話をしました。身振り手振りで、もちろん勝った時の自慢話です。誰でも負けた時の話は内緒にしたいものです。

みちるは意地悪く、

「次は横綱になれるといいね」

ジャンボは睨みつけて、

「俺はまだ幕下とでも言いたいのか？」

「そういう意味じゃないよ。えーと」

シロベエが二人に割り込むように、

「晴れた顔でいこう！」

少年二人は互いに目線をそらしました。シロベエは吊るされている紐を軸に大きく円を描きました。それから、数回くるくると回り、ぴたつと止まりました。

「ボクは雨が好きだ。みちる君は何が好きなの？」と、シロベエ。

みちるは急の質問にぴくりとして、

「えーと、そうだな。僕はどちらかという晴れた日がいいけど」

「どうして？」

「傘を持たずに外に出られるから。海や山、公園に行って、詩をつくるのが好きなんだ」

今度はジャンボが意地悪い目をして、

「みちるは文学者だからね。いい詩をつくったら俺にも聞かせてくれ。俺が点数つけてやるよ」

「君に詩の何がわかるって言うんだ」

シロベエが割り込むように、

「みちる君！」

「何？」

「雨の日じゃ、詩はつくれないのかな？」

「そんな事ないよ。ただ、何て言うか」

返事に困った様子のみちる。ジャンボは腕を組んでいました。

シロベエは、

「ボクは雨が好きだ。だって雨が降らないと、誰もボクに話しかけてくれないもの。そうだよ、てるてる坊主は、晴れるように願いを込めて吊るされてるんだ、晴れるようにね。運動会とかピクニックに行く前の日はいいんだけど、何日も晴れた日が続けば、ボクはひとりぼっち。誰もボクに話しかけてくれない。忘れられてるんだ。ひとりぼっちは寂しいものだよ」

シロベエは一拍おいて続けました。

「だから、みんなには悪いけど、ボクは雨が好きなんだ」

「ぼ、僕も雨は嫌いじゃないよ」みちるは軽く自分の頭を叩いて、「本当だよ。今日だって雨をテーマにした詩も考えてたんだ。まだ未完成だけど」

「完成できるといいね」

「絶対完成させる。シロベエにプレゼントするよ」

「ありがとう、みちる君」

シロベエは嬉しそうに円を描きました。みちるは同情しました。ひとりぼっちは寂しい、か。何だか自分のセリフみたい。みちる自身も心の中でよく叫んでいる言葉です。学校でジャンボたちがグループになって楽しくふざけ合ってるのを見るとうらやましく思う事もあります。これは偶然出会ったオバケじゃない。シロベエは自分自身じゃないのかと思うみちるでした。

シロベエはブランコのように縦に揺れていたのを止めて、「ジャンボ君」

瞬間、みちるが「ぱちん」と両手を合わせました。シロベエはそれで気づいたようです。

「あつごめん、ジャンボだったね。次はジャンボの番だよ、キミの好きな物は何？」

ジャンボはみちるをちらりと見て、シロベエの方に向きを変えてから、

「好きな物ねえ、天気の話？」

「天気にこだわらなくていいよ、ジャンボの好きなモノだよ。お菓子でも、スポーツでも、ジャンボの好きな物を教えてよ」

「そうだな」ジャンボは一息はいて、「横綱かな」

「ヨロズナ？」と、シロベエ。

「すもうの横綱の事だよ」と、みちる。

ジャンボはもったいぶった間をあけて、

「その通り、すもうの一番上の位、横綱。正直言うと、すもう大会でまだ一度も優勝してないんだ。あと一人まではいくんだけど、最後に負けちまって、まあ、無冠の帝王って奴かなあ」

シロベエは大きく円を描いて、

「顔晴れ！」

みちるも復しようして、

「顔晴れ！ ジャンボなら、きっと優勝して横綱になれるよ」

ジャンボは少し照れて、

「ありがとよ。しかし、優勝はあくまで目標だ。俺のモットーは、レッツチャレンジさ」

ジャンボは右手を大きく突き上げて、「レッツ・チャレンジ！」そして、両手を突き上げて、「アム・ア・チャンピオン！」と、まるでボクサーのように動きました。

みちるは拍手しながら笑いました。シロベエも嬉しそうに笑っています。いや、シロベエの顔は無表情なのですが、そのように見えたという事です。いつの間にか、少年二人とオバケのシロベエは仲良くなっていました。

シロベエは体を左右に4回揺りました。小さく、大きく、中程、中程。

みちるはうなずいて、

「それは友情のしるしだね。僕たちは友だちだ」

「右に同じ」とジャンボもうなずきました。

「ありがとよ、お友だち」シロベエはぴたりと止まって、「もう雨が止んだみたいだ、お別れだね。みちる君も、ジャンボも元気でね、今日は楽しかったよ」

みちるは目を大きく開いて

「お別れだなんて、もっと話をしようよ」

ジャンボも慌てた様子で、

「そうだよ、俺たち友だちだろ」

「ありがとよ、お友だち」

その言葉を最後に、シロベエは返事をしませんでした。まばたきをして、目を閉じたようにも見えました。

みちるは大声で叫びました。

「起きろ、シロベエ！ シロベエ！」

返事はありません。みちるは溜息をつきました。ジャンボも、みちるも何度も話しかけましたが、シロベエは何も応えません。部屋が暗くなり、夢から覚めた感じです。

少年二人はうしろ髪引かれる思いで扉に向かいました。みちるとジャンボは建物の外に出ました。雨は止んでいます。青空が広がり、まぶしい太陽が二人を迎えてくれます。

ジャンボは威張った感じで、

「俺の勝ちだな。お前が先に悲鳴を上げて逃げ出した」

みちるも言い返します。

「でも、外には出てないよ。君の方こそ大騒ぎして机を壊したじゃないか。君が脅えた顔を隠そ

うと僕に背中を向けてたのはわかってるんだから」

二人は睨み合いました。雨だれが二人に落ちました。冷たいしずくが首筋にぼつん。二人は同時に悲鳴を上げました。みちるは首筋に手をやって苦笑い、とジャンボに目を向けると、ジャンボは顔をしかめて足をなでていました。どうやら机にぶつかった時に足を痛めたようです。

みちるは心配そうに、

「足、痛むの？」

「痛くねえよ！」

言葉とは裏腹に、ジャンボは顔をしかめてます。この時、みちるはジャンボは優しい人だと気づきました。僕が転んで助けを呼んだ時、ジャンボは僕の前に立っていた。僕を守ろうとしてたんだ。そう言えば、ジャンボは口は乱暴だけど、弱い者いじめしてる所は見た事ないや。掃除当番だってサボった事ないはずだし。体がでかくてケンカが強いから、悪い人？ オバケのようだから、恐い人？ そんな事ないよね。僕は外見で人を判断してた。反省しなくちゃ。

みちるはロゲンカするのをやめました。シロベエも、きっとそれが言いたかったんだ。友だちを大切にしろって事を。みちるは思い切って右手を差し出すと、ジャンボは照くさい様子で握手をしました。

ジャンボは大きく背伸びして、

「空気がおいしいや」そして、建物の方をちらりと見て、「雨の日も悪くない」

「同じく」と、みちるも賛成しました。

みちるは何か思案していたらしく、小さくガツポーズしました。

「僕、野球は下手だけど、チームに入ってもいいよ」と、みちる。

「本当か、そいつは救かる」と、ジャンボ。

「但し、条件がある」

「何だよ、条件って？言ってみる」

「雨の詩をつくったんだ。僕のつくった雨の詩を聞いてもらいたいんだ」

「オーケー。いつでもどうぞ」

みちるは片目をぱちりとして、深呼吸。そして、雨の詩をひろうしました。

お空が暗くなったよ

誰かが涙を流してる

どうして泣いてるの？

二人がケンカしたから

まーるい雲もなっています

お空が明るくなったよ

どうして笑ってるの？

それはきつと

ふたりが仲良しだから

まーるい太陽も笑っています

雨だれが、ぽつんと落ちました。

何かが顔についてるよ

どうして涙を流してるの？

これは雨だれだよ

みちるは緊張をほぐすように深呼吸して、ジャンボに尋ねました。

「どんな感じ？」

ジャンボは腕を組んで、「うーん」と、うなりました。

みちるは心配そうに、

「正直に言って、何点ぐらい？」

「そうだな」と、ジャンボは親指と人差し指をくっつけて輪をつくりました。そして、両手を広げて頭の上で円をつくり、「ゼロじゃないぞ、マル。花丸合格点だ」

少年たちは大笑いしました。そして、仲良く水たまりを歩いて行きました。